

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520228

研究課題名(和文) 外地引揚者の文芸的实践とその社会的記憶編成をめぐる交渉的研究

研究課題名(英文) Negotiations research concerning literary practice and its social memories of repatriates from colonial countries

研究代表者

中根 隆行 (Nakane, Takayuki)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：80403799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、朝鮮や満州から帰還した外地引揚者による小説や詩歌回想記などを対象に、同時代のメディア報道やその文化表象といった社会的記憶と比較しながら、彼らの文芸的实践を検証している。また、特に朝鮮からの引揚者に焦点をあて、植民地時代の日本語創作との比較を通じて、引揚者の文芸的实践の特徴を考察した。これらの検証によって、戦後日本における外地引揚者の社会的記憶が悲劇的なイメージをもって語られるようになる一方、外地引揚者の文芸的实践とその評価は、多様な広がりを持っていることなどを明らかにしている。

研究成果の概要(英文)：This research is about literature (mostly novel, poem, and memoir) of repatriates from colonial countries like Korea or Manchuria. The article will verify literary practice of repatriates from colonial countries by cross-examining literary works of same generation through media report and cultural representation.

This research focuses mainly on repatriates from Korea. Characteristics of literary practice of those repatriates were contemplated by comparing their literary works with Japanese compositions during Japanese colonial period. The result shows that social images of repatriates after 1945 were portrayed very tragically, but literary practices of repatriates were definitely being assessed with a variety of views.

研究分野：日本近代文学・文化誌

キーワード：外地引揚者 引揚者文学 植民地文学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に関する研究開始当初の研究動向は、以下のとおりである。本研究の学術的背景としては、(1)外地引揚げの社会・歴史的研究と、(2)外地引揚げをテーマにした文学・文化史的研究との二つに大別できる。(1)については、若槻泰雄『戦後引揚げの記録』(1991)や加藤陽子「敗者の帰還」(『国際政治』1995)といった先行研究があり、近年では成田龍一「引揚げ」に関する序章(『思想』2003.11)や丸川哲史『冷戦文化論 忘れられた曖昧な戦争の現在性』(双風社、2005)などによって、外地引揚げ自体の体験とともに、それらが叙述される戦後の歴史性が問われている。また、(2)については、西原和海「戦後日本の満洲ネットワーク 引揚げ文化人を中心に」(『社会文学』2002.8)のように旧満洲引揚げ者の戦後における人的ネットワークを検証する研究がある一方で、波瀾剛「故郷を創造する 引揚げ者 安部公房とシュルレアリスム」(『日本語と日本文学』2003.3)といった作家の外地引揚げ体験をテーマにした作品論や、天野知幸「記憶の沈潜と二つの戦争 引揚げ・復員表象と西條八十」(『日本文学』2006.11)など、敗戦後における外地引揚げ表象を分析する文化史研究がある。

## 2. 研究の目的

本研究「外地引揚げ者の文芸的实践とその社会的記憶編成をめぐる交渉的研究」は、1945年から1950年代における朝鮮・旧満洲地域から帰還した外地引揚げ者による文芸的实践の軌跡を分析し、外地引揚げ者にかんするメディア報道の推移との比較から、それらの交渉的關係の位相を検証することを研究開始当初の目標に設定している。

1945年の日本の敗戦以降、海外から引揚げた日本人は、軍人・軍属を含めて約660万人といわれている。このなかで朝鮮・旧満洲地域からの引揚げ者は、民間人に限っても約192万人であると推定されている(厚生省援護局『引揚げと援護 30年の歩み』、1978)。こうした外地引揚げ者の12記憶は、それぞれの地域や世代、個々人の体験等によってさまざまであるはずだが、日本の敗戦と外地引揚げの社会的記憶は、戦後においてある程度定型化されて語られる傾向にあった。

本研究では、(1)1945年から1950年代における朝鮮・旧満洲地域から帰還した外地引揚げ者による文芸的实践のありようを検証し、(2)外地引揚げ者にかんするメディア報道や大衆文化表象の推移と比較対照することで、それらの交渉的關係から外地引揚げの社会的記憶編成の位相を検証するために、外地引揚げ者の文芸的实践と同時代の社会的記憶編成との關係性を歴史的に位置づけることを研究の目的として設定した。

## 3. 研究の方法

本研究は、これまで注目されてこなかった無名の外地引揚げ者による文芸的实践に焦点をあて、その特徴を量的に把捉し、資料的発掘にとどまらず、同時代の社会的記憶編成のなかで位置づけることをめざした。研究方法としては文学テキストの個別性と社会的文脈を配慮しながら、外地引揚げという社会的記憶の編成との交渉を視野におきながら関連資料を収集した。外地引揚げの記憶が、戦後日本における敗戦から1950年代的心性を裏面においていかに支えていたのかを実証するとともに、そうした社会的記憶とは一線を画するような文芸的实践の位相を検証しようとした。

そのために、まずは関連研究の動向を把握した上で、国内外での資料調査を継続的に実施し、収集した資料の整理・書誌作成を実施した。国内資料調査では主に本研究の基盤となる同時代資料の発掘・調査・収集にあて、海外での資料調査は各年度1~2回実施し、外地引揚げにかんする関連資料調査を行った。

(1)朝鮮・旧満洲地域からの引揚げ者による文芸的实践:引揚げ者の文芸的实践については、それらの資料的発掘と量的把捉を心がけ、収集資料のデータを蓄積した。また、テキスト分析とともに、文芸的实践の意図や社会的文脈を明らかにするために、引揚げの拠点港や戦後の俳誌やサークル誌の調査を綿密に実施した。

(2)外地引揚げの社会的記憶編成:社会的記憶編成については、奥野芳太郎編『在外邦人引揚げの記録』(1970)による時期区分 主力引揚げ期(1945-47)/共産圏引揚げ期(1948-50)/大空白期(1951-52)/続共産圏引揚げ期(1953-59)を参考に改めて三つの時期に分け、外地引揚げにかんするメディア報道と同時代表象を中心に(1)との交渉的關係を検証した。

(3)戦前の文芸的实践との比較考察:研究成果の対象である村上杏史については、植民地期の朝鮮における朝鮮俳壇や俳誌『カリタゴ』の動向、また原口統三については、旧満洲における少年期の詩作や日本語文芸の環境、第一高等学校における文芸創作や校風などの動向を検証に加えた。

以上、本研究では、外地引揚げ者による文芸的实践と社会的記憶編成との關係性を解明するために、網羅的な資料調査・収集による実証的作業を旨とした。これについては収集資料のデータベース化を進め、蓄積している。

## 4. 研究成果

1945年の敗戦以降、海外から帰還した日本人は軍人・軍属を含めて約660万人と言われている。朝鮮半島や旧満洲地域の民間人に限っても、その数は約192万人と推定されている。軍人の帰還を「復員」というのに対して、帝国日本の旧植民地や海外で生活し、敗戦後に帰還した一般の日本人は「引揚者」、特に旧植民地から引揚げた人々は「外地引揚者」と呼ばれている。

こうした外地引揚者たち 厳密にいえばその一部ではあるが の経験は、敗戦後に綴られた多くの引揚げ体験記からうかがうことができる。成田龍一は、その引揚げ体験刊行の推移を1950年前後からの時期と1970年代以降に大別できると指摘している。前者の事例は、藤原てい『流れる星は生きている』（日比谷出版社、1949年）、赤尾彰子『石をもて追わるる如く』（書肆ユリイカ、1949年）、森文子『脱出行』（開頭社、1948年）や、『秘録大東亜戦史』（全10巻、富士書苑、1953年）における「朝鮮篇」「大陸篇」所収の引揚げ手記であり、後者の事例は、藤原・赤尾らの手記も抄録される『大東亜戦史』（全10巻、富士書苑、1969-73年）の「朝鮮編」や井出孫六『終わりなき旅』（岩波書店、1986年）などとともに、いわゆる森崎和江ら「植民二世」たちの体験記が語られ始める時期に重なりとされている。

このなかでも、たとえば1949年に発表され、映画化もなされ話題になった藤原てい『流れる星は生きている』に象徴されるように、1950年前後の時期に発表された外地引揚げ体験記は、敗戦そして引揚げの記憶が生々しい時期に執筆されたものでもあることから、いわば戦後日本の出発のさまざまな苦難に重ねられ、国民的記憶を補強する大きな物語のひとつとして語り継がれている。だが、外地引揚げの記憶は、多くの人びとが共鳴できるような物語として流通する一方、それがどのように記述され、引揚者をめぐるいかなる歴史的な文脈から形成されたのかに関しては明らかにされることが少ない。そもそも外地引揚げ体験とは、引揚者のさまざまな個人的な事情はいうまでもなく、地域的にも異なる多様な記憶の集積としてある。このような観点から、本研究の研究成果では、学術論文として公表した内容を中心に、以下にまとめて記述する。

(1) 外地引揚者の文芸的実践としては、朝鮮引揚者の手記もしくは回想録で社会的記憶の一端を担うものは少ないという特徴を持っている。その理由として挙げられるのは、引揚者の社会的記憶が概して悲劇的なものとしてとらえられる傾向にあるという点、それが地域的にいえば旧満洲や大陸からの引揚者に比重がおかれるという点である。朝鮮からの引揚者は、ある意味で植民地委

時代の生活が比較的豊かであり、植民地統治の支配者層として位置づけられることや、朝鮮半島での生活史や外地引揚げの苦難も戦後の政治的状況のなかであまり語られることはなかったことが背景として推察される。

こうした特徴を満たすものとして、村上杏史『手記 三千里』（以下『三千里』と略記する）という朝鮮引揚げ体験記がある。村上杏史（1907-1988）は愛媛県中島生まれの俳人であり、戦後、俳誌『柿』を主宰するなど愛媛のホトトギス系俳句の振興に努めた人物として知られる。彼は戦前、朝鮮全羅南道の木浦で四半世紀余りを暮らした在朝鮮日本人であり、引揚者でもあった。

村上杏史の引揚げ体験記『三千里』は、まず彼自身が発行していた『柎門五句集』という手刷りの小冊子に連載され、会員である杉浦知恵子によって点字訳がなされ国立盲人図書館や愛媛県盲人協会などに寄付されたという経緯をもっている。「柎門」とは、植民地時代の木浦で俳人清原柎童に教えを受けた門下生という意味である。つまり『三千里』は、木浦を中心に俳句をたしなみ清原柎童にゆかりのある在朝鮮日本人のために書かれ、そして読まれた手記である。この引揚げ体験記の点字訳が周辺で評判になり、1960年6月には全国木浦会から謄写版で発行、1969年には村上杏史が主催する柿叢書として活字化され再版されることになる。前述の朝鮮引揚者の文芸的実践の特徴を踏まえれば、村上杏史『三千里』という外地引揚げ体験記の成り立ちだけをみても、柎門の俳人たち、点字訳の読者、そして全国木浦会の人々や愛媛地域を中心とした俳句関係者といった繋がりが推察できる。

文芸的実践としての外地・海外における俳句や短歌の活動は、芸術的な表現をめざしがちの小説や詩とは異なり、その担い手の数も規模は桁違いに大きく、まずは俳人歌人間のコミュニケーション・ネットワークの形成に向かう傾向にある。たとえば在朝鮮日本人における俳句は、異郷の地にあって日本人たるアイデンティティを移住者が再確認するための身近な芸術的ツールであったのであり、1920年代になると高浜虚子のホトトギス系俳句を中心に結社が各地域に続々と誕生している。その朝鮮俳壇にあって注目されたのが「朝鮮の子規」とも称された朝鮮俳人朴魯植であり、彼の年賀状に記された俳句が機縁となって木浦で俳句を始め、清原柎童を師と仰いだのが村上杏史である。朴魯植の夭折、病による清原柎童の内地帰還を経て、彼らによって培われた木浦の俳誌『カリタゴ』を引き継いだのも村上であった。その俳句で繋がる人的ネットワークが村上杏史の外地引揚げに深くかかわっていたことは述べたとおりである。

もちろん、ここで指摘しておかなければならないのは、この木浦と俳句で繋がる人的ネットワークは、植民地統治下の支配層たる在朝鮮日本人によって形成されたものであり、植民地支配の力学のなかで培われたものでしかないということである。まさにそれは村上杏史の植民者意識として、意識的にも無意識的にも『三千里』に刻印されており、38度線脱出や木浦引揚げの行程にみられた在朝鮮日本人の現実の活写によって示されている。何よりも象徴的なのは、「北辺」を除く手記本文には、村上杏史によるものはもとより、朴魯植の「碧波津」と題された「難灘や今宵千鳥の鳴くばかり」以外の句は載録されていない。つまり、日本の敗戦／朝鮮の解放時から愛媛県中島に引揚げまでの村上杏史の体験は、到底、俳句には詠みえないものであり、引揚げから十数年を経てようやく、おもに木浦と俳句で繋がる人々を対象に文章で綴るしかなかった経験なのである。『高麗』にもこの間の作句は載録されていない。村上杏史『高麗』で引揚げ後に最初に採られている俳句は「朝鮮が憎くて恋し天の川」であった。

(2)村上杏史の外地引揚げ体験記である『三千里』や敗戦・引揚げの様相をかるうじて推察することのできる句集『高麗』は地方での限定された出版物として位置づけられる。この背景には、朝鮮引揚者の文芸的実践の特徴がある一方、それではなぜ村上杏史はこうした体験記を活字にしたのかという謎も残る。ここには、戦後の彼の文芸的実践が植民地統治期の文芸活動の延長線上に位置づけられること、そして、このような文芸的実践がのちの俳句による日韓文化交流に繋がるということは看過できないであろう。

1956年10月頃、愛媛中島の村上杏史のもとに韓国から一通の私信が届いている。9月28日付の航空便で差出人は「李桃丘子」と記されていた。そこには「村上先生、おかはりはございませんか、去る九月中ばに朴琪鐘氏のお宅を訪問し御家族一同にお目にかかりました。朴氏は九年前に結婚され、現在二男一女の父となり、金湖洞（南山の南側山麓）の政府官舎に、団樂の生活をして居られます。お母様もいとお元気で朴魯植氏の生前、歿後の村上先生の御厚志溢る御援助に対しいろいろとお話せられ、是非いつかまたお目にかゝることの出来る日の来るのを待つて居ると云はれました」とあった。

余程の感激であったのか、村上杏史はその顛末を「朴魯植遺族のこと、李桃丘子により明白になったとのこと、私も喜ばしく思ひます」という高浜虚子の言葉とともに、翌年二月の『ホトトギス』誌上に綴っている。朴琪鐘が政府高官であることを気にしてか、李桃丘子の手紙には「朴氏宛に村上

先生からお送り下さる御手紙は、今後小生宛にお送り下さるやうお願い致します。諸事情をお察し下さい」ともあり、原稿を一読した高浜虚子も「唯あの文章を公にして朴魯植氏の遺族が親日家の繋りとして疑を受けることがありはしないかと一寸心配になりました。其点は如何でせうか」と書状を書き送っている。

一連の経緯はこうである。「韓国李桃丘子といふ雑詠の名前をたよりに朴魯植の遺族の安否を尋ねてほしいと依頼してから三年目、桃丘子氏の熱心な探索によつてようやくその無事が判明し、度々その近況を知らして下さるのである。」「雑詠」とあるのは『ホトトギス』雑詠欄のことで、李桃丘子の名が見られるのは1954年2月の「末枯るゝ向日葵のなほ豪奢なる」と3月の「もの影の外を飛びをり秋の蝶」の二句である。いうまでもなく韓国人による俳句の載録は、これが戦後初の事例である。1945年の日本の敗戦／朝鮮の解放後、しかも朝鮮戦争の休戦協定が結ばれて直後の時期にあって、たとえ俳号であれ韓国俳人が日本の俳句雑誌に投句していたという事実は注目に値する。だがそれ以上に、この二人の手紙のやり取りが、日本の敗戦／朝鮮半島の解放を跨いだ俳句による日本と韓国のコミュニケーション・ネットワークを紡ぐ、ひとつの出発点となったということは注目してよい。

李桃丘子が畏敬していた朴魯植と村上杏史の関係はこうである。朴魯植が中心となって朝鮮の木浦で発刊された俳誌『カリタゴ』は、彼の死後に村上杏史が受け継いでいる。村上杏史は、朴魯植のことを「短歌時代からの知己であったが後に私も俳句に導き入れてくれ」と語っている。村上杏史の師は清原柎童だが、彼の『カリタゴ』参加は「昭和二年友人朴魯植からの年賀状に「抱へるれば事足る子なり大手毬」があつて興味を覚え」たことが契機である。また、村上杏史『高麗』を読み「恰も朴魯植の作句にめぐり合ふ如き錯覚に陥って、両氏の因縁の浅からざることを痛感した」という井上兎径子も朴魯植に教えられた一人である。朝鮮俳人が在朝鮮日本人に俳句を教えること。それは朝鮮俳人の輩出とともに、朴魯植とその俳句によつてもたらされた朝鮮俳壇の大きな財産だといってよい。

1956年の村上杏史と李桃丘子の往復書簡に戻る。「戦後のホトトギスに、朴魯植の点じた灯火が一つだけ残つてゐるやうに、韓国、李桃丘子の名が見られた。未知の人ではあるけれども、俳諧に繋る縁をたよりに朴魯植遺族の安否を探ねる事を依頼した。ここから村上杏史の心情は読みとれる。

それでは李桃丘子こと李漢水にはどのような「俳諧に繋る縁」があったのか。のちに彼は「先輩に朴魯植あり椿の忌」と詠んでおり、朴魯植や高浜虚子を敬愛していたことは確かである。李漢水が俳句に出逢

ったのは1941年のことであり、「わたしは中学二年の教科書にあった子規の句「柿二つ」が気に入り、つい俳句をやり出した」と彼は述べている。この「つい」という言葉は非常に重い。というのは「父は朝鮮総督府時代にミッション・スクールの反日思想教育者として当局に憎まれてながく牢屋にぶち込まれ、その後も二次大戦が終るまで警察のきびしい監視をうけたのであるが、どうしてこのような家庭出身のわたしが俳句に興味をもちつづけたかちよつと不思議でもある」と語られている。

ここに窺えるのは、一見奇妙なことではあるが、反植民地主義者として父を収監した帝国日本とその宗主国文芸である俳句を分立してとらえる心性である。しかもそれは、親日という政治性や文学による内鮮融和という観点から把捉された高浜虚子らの朴魯植像とは明らかに異なっている。韓国俳人李桃丘子こと李漢水の言葉は、俳句という旧宗主国文芸と内鮮融和というイデオロギーの間に逆に楔が打ち込まれることを意味しており、そこでは親日という政治性もまた、文学とナショナル・アイデンティティの狭間で細分化を迫られるからである。李漢水はその後、『ホトトギス』と村上杏史が主宰する愛媛の俳誌『柿』を始めとする日本の俳誌で活躍し、1971年には『句集韓国』を刊行する。彼は俳句に関心をもつ韓国人のなかで最も知られる韓国俳人となる。

他方、村上杏史は、朴琪鐘ら遺族とも再会をはたし、初句集『高麗』を出版してのちに『朴魯植俳句集』を刊行、一九六五年の日韓基本条約締結以後は、たびたび慈善事業や吟行で韓国を訪れ、韓国俳人らとも交流を重ねた。また彼が主宰した『柿』は、李漢水を筆頭に、崔炳璉や曹星国など韓国人会員が多く集まる俳誌へと成長する。

村上杏史の朝鮮引揚げ体験記『三千里』は、彼の植民地時代における朴魯植の俳句との出会いや木浦の俳誌『カリタゴ』の主宰があり、またその後における愛媛での俳句活動と韓国俳人との交流など、戦前の朝鮮半島、そして戦後の愛媛と続く一連の経路のなかで位置づけられる。それは、戦後日本における外地引揚げ者の社会的記憶のなかで決して大きく語られることのなかった経路でもある。

(3)戦後日本における外地引揚げの社会的記憶の形成史のなかで、在朝鮮日本人であった村上杏史の事例とは異なる経緯を辿ったものもある。厳密にいえば外地引揚げ者ではないが、旧満洲で少年期を過ごした原口統三の場合である。

敗戦後、旧制高校や大学の学生たちを中心に衝撃を与えた出来事として知られるのが、原口統三の自殺とその遺稿『二十歳のエチュード』の出版である。1946年10月25日に第一高等学校の学生であった原口

統三が逗子海岸で入水自殺を遂げている。彼は京城に生まれ大連に育った植民者二世でもあった。その翌年には彼の遺稿を橋本一明がまとめた『二十歳のエチュード』が前田出版社から刊行されている。初版と再版それぞれ5000部は瞬く間に完売した。その後、書肆ユリイカから改版して刊行、同社唯一のベストセラーといわれる。1952年以後は角川文庫の一冊として約30年にわたって版を重ねたロングセラーとなり、『二十歳のエチュード』は、「純潔」「無垢」「自意識」といった特有の鍵語をともなって、いまなお天才肌の夭折詩人の書として語り継がれている。

この原口統三の自殺と『二十歳のエチュード』が引き起こした社会現象の経緯を追うことで、ひとりの青年の自殺がその遺稿をもっていかに偶像化されたのかという道筋を考察した。そして、『二十歳のエチュード』における夭折詩人像が読者にどう提示されたのかという視点からこの夭折詩人像の成型をとらえなおし、そこに必ずしも強調されていない旧満洲の大連の描かれ方とともに検証した。

唐木順三に倣えば、『二十歳のエチュード』は、「精神の肉体」が「家庭、学校、家族、国家」を夾雑物として次々に削ぎ落とす物語ということになる。これは逆に「家庭、学校、家族、国家」を前提としていなければ「精神の肉体」は存立しえなかったといひ換えることができる。それでは「精神の肉体」は、どのような実生活を経て生まれたのだろうか。原口統三『二十歳のエチュード』は時系列順の三部立てになっているのだが、「人生そのものを芸術とする」という宣言から始まるその構成をみると、削ぎ落とされる実生活のなかでもっとも異質で存在感を有する物語因子は、彼が育った大連にかんする章句である。

たとえば、「自叙伝。　　気まぐれな植民地育ちの夢想児は、日本の土を踏んで、祖国の鈍重な阿呆面に、失望し、退屈した挙句、苦り切つて一人お芝居をした」であるとか、「大連。　　彼は植民地の子供である。祖国の山河は、絵本の中に住んでゐた。そして、外国も、やはり海の向ふにあつた」といった箇所である。大連に育ち一高に進んだ学歴エリートの来し方は、故郷喪失者のアイデンティティ表象として戯画的あるいは幻想的に綴られている。また、大連の描かれ方にしても、植民者二世の外地表象という点ではロマン主義的なヒロイズムの典型ともいえる。つまり、敗戦後の植民者二世による旧外地表象としてはやや前衛的なものではあるが、『二十歳のエチュード』の他の辛辣な箴言のなかには、ある意味で感傷的、情緒的な表現に収まっているのである。これは何を意味しているのか。

「大連よ。今、僕の疲れた魂がお前の顔を思ひ出す。そして失はれてしまつた僕の

豊かな「詩人の辞書」を懐しむのだ。今の弱気な僕の手にも月並みな泣き言以外に何が書けるだらうか。〔 / 〕嘗てあらゆる「比喻」と「真似言」を軽蔑した僕、あの時の僕はどこへ行つたのだらう。〔 / 〕表現を破壊した僕に、表現が戻ってくるわけではない。」この「大連よ」という呼びかけは、『二十歳のエチュード』の末尾に近い箇所都合三度なされている。

かつてそこに暮らしいまは異郷となった大連が、こうした呼びかけの対象になっているのは郷愁からである。この場合、「僕の疲れた魂がお前の顔を思ひ出す」とあるように、大連は他者として擬人化されている。すなわち、大連の「顔を思ひ出す」とは、それを思ひ出す脳裏のなかで、同時に大連から見られているという感覚を伴っているのだ。それは、大連を想起すると同時に、原口統三がその大連から何らかの情動を喚起されているということでもある。

このきわめて異質である大連にかんする章句が、どのように読者に理解されたのかという点である。『二十歳のエチュード』は、敗戦後の若者たちの曰く言い難き不安や疎外感を、人生や実存にかかわる困難や批評的課題として代弁したことにおいて共感を呼び、語り継がれた。そのとき、この大連にかんする章句は、読者にとってどのようなものとして了解されるのだろうか。もちろん、これら大連の記述は、決して無視されたわけではないのだが、旧満洲の大連にかんする事項は、あたかもなかったかのように読まれた形跡があるのだ。大連の植民者二世としての原口統三ではなく、第一高等学校に在籍する夭折詩人としての原口統三像の神話化をここにみることができる。その際、外地での経験とともに、敗戦によって故郷喪失者となった原口統三の歴史性をともなった心性は、内地の学歴エリート的一般性のもとに回収されたのではないかと推察される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

(1)中根隆行「宗主国文芸の転回 朴魯植と日韓俳句人脈」『社会文学』37号、2013年2月、pp.15-24、査読無

(2)中根隆行「村上杏史と外地引揚げ体験記の文脈 『手記 三千里』を読む」『歴史の資料を読む』創風社出版、2013年、pp.244-263、査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

(1)中根隆行「原口統三『二十歳のエチュード』をめぐる座標系 夭折詩人と大衆化」東アジアと同時代日本文学フォーラム第2

回国際シンポジウム「大衆化社会と日本語文学」、2014年10月26日、中国北京市：北京師範大学

(2)中根隆行「朝鮮詠と郷土 異郷を詠む俳句の素性」愛媛大学法文学部と新潟大学人文学部との学術交流講演会、2013年12月21日、愛媛県松山市：愛媛大学

(3)中根隆行「木浦から愛媛へ 朴魯植・村上杏史・李桃丘子」愛媛大学法文学部国語国文学会、2013年3月3日、愛媛県松山市：愛媛大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

中根 隆行 (Nakane, Takayuki)  
愛媛大学・法文学部・教授  
研究者番号：80403799

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：